

国際日本学研究所

【2024年度大学評価総評】

研究所主催の研究活動として研究会5回、国際シンポジウム2回、ワークショップ1回を行うなど、活動的な研究活動を実施しているものと評価される。

2023年度は、前年度の大学評価結果総評における指摘を受けて、研究員の専門分野に限定されないテーマ「トランスナショナリズム」を掲げ実践したこと、社会学・哲学・人類学・歴史学・政治学等、国内外の研究者が協働する調査研究を行ったこと、「学際分野の拡充への期待」に対して情報科学と文系分野のコラボ企画として研究会を行ったこと、など指摘事項への対応状況も十分に評価される内容となっている。併せて、学外有識者による外部評価を受け「国外との研究連携事業」「国内研究会活動」「データベース事業」「刊行物等」「その他」の五項目すべてにおいて高い評価を得たことも特筆すべきである。特に前半部分は研究所としての存在意義を強く支える視点でもあるので、継続的な努力とさらなる向上を目指していただきたい。

なお、2023年度中期目標・年度目標達成状況報告書の「社会貢献・社会連携」の年度目標に対する自己評価の理由について、より対応した内容・表現が望まれる。

大学基準協会の第4期大学基準に基づいた評価項目の充足状況の確認

2024年度自己点検・評価シートに記載された I 現状分析を確認	すべての評価項目で「はい」が選択されており、充足していることが確認できた。
-------------------------------------	---------------------------------------

【2024年度自己点検・評価結果】

I 現状分析

基準1 理念・目的

- 1.1 大学の理念・目的を適切に設定すること。また、それを踏まえ、学部及び研究科の目的を適切に設定し、公表していること。

1.1①研究所（センター）の理念・目的を明らかにしていますか。	はい
1.1②研究所（センター）の理念・目的を規則等に明示し、かつ教職員及び学生に周知し、社会に対して公表していますか。	はい
【根拠資料】	
法政大学国際日本学研究所ウェブサイトとパンフレット（紙版）	

基準2 内部質保証

- 2.1 内部質保証のための方針を適切に設定していること。また、教育の充実と学習成果の向上を図るために、内部質保証システムを整備し、適切に機能させていること。

2.1①研究所（センター）において、研究所長（センター長）及び運営委員会等の権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。	はい
2.1②研究所（センター）において、自己点検評価結果を活用して改善・向上に取り組んでいますか。	はい
【根拠資料】	
法政大学国際日本学研究所規定と運営委員会議事録	

基準3 教育研究組織

部局による自己点検・評価は実施しない

基準4 教育・学習

部局による自己点検・評価は実施しない

基準5 学生の受け入れ

部局による自己点検・評価は実施しない

基準6 教員・教員組織

部局による自己点検・評価は実施しない

基準7 学生支援

部局による自己点検・評価は実施しない

基準8 教育研究等環境

8.1 研究活動に関わる支援、条件整備を通じ、研究活動の促進を図っていること。また、健全な研究活動のために必要な措置を講じていること。

8.1①「法政大学研究倫理規程」に沿って、学生も含めて研究倫理の遵守を図る取り組みを行っていますか。	はい
【根拠資料】	
法政大学研究倫理委員会規定	

基準9 社会連携・社会貢献

9.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施していること。また、教育研究成果を適切に社会に還元していること。

9.1①「研究及び社会貢献に関する方針」のもと、学外機関・地域社会等との連携、大学が生み出す知識、技術等を社会に還元する取り組みを行っていますか。	はい
【根拠資料】	
法政大学国際日本学研究所ウェブサイト 各種開催案内	

基準10 大学運営

部局による自己点検・評価は実施しない

上記の現状分析結果において、【いいえ】と回答した項目があった場合は、その理由と改善計画について記入してください。

大学基準	【いいえ】と回答した点検・評価項目を記述してください
基準を選択してください	
【いいえ】と回答した理由と、改善の必要がある場合、改善計画について記述してください。	

II 改善・向上の取り組み

1 2023年度 大学評価委員会の評価結果への対応

<p>【2023年度大学評価結果総評】（参考）</p> <p>国際日本学研究所では、多くの、研究・教育活動（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等研）、研究成果の对外発表（出版物、論文、学会発表等）を行った点が、高く評価できる。</p> <p>研究・教育活動では、説明会1回、研究会3回、イベント1回、ワークショップ1回、勉強会1回を実施した。研究成果の对外発表では、出版6編、論文10編を執筆し、学会発表9回を行っている。また、ヨーゼフ・クライナー氏（国際日本学研究所客員所員、ボン大学名誉教授）が、第4回人間文化研究機構日本研究国際賞受賞（2022年10月、大学共同利用機関法人 人間文化研究機構）を受賞した。外部資金では、2022年度中に応募した科研費は14件、2022年度中に採択を受けた科研費は26件であった。</p> <p>自己点検・評価書類の記述内容は、ともすると個々の研究員の対応が中心のような印象を受けるが、哲学と歴史学と社会学の研究者が協働でアルザスでのワークショップを開催するなど、国際日本学研究所という組織があって初めて可能となる取り組みもあり、またその成果も国際的にも高い評価を受けて</p>
--

きたことについては、大いに評価されるべき事項である。

今後、COVID-19 禍から通常に戻る中で、禍中に得た経験も活かして、さらに高い水準の研究、教育が行われることを期待する。また、学際分野の拡充にも期待する。さらに、外部からの組織評価（第三者評価等）の導入に、取り組まれない。

【2023 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2023 年度は、研究所主催の研究活動として、研究会 5 回、国際シンポジウム 2 回、ワークショップ 1 回を行った。「個々の研究員の対応が中心のような印象を受ける」との評価を受け、年度の最初に研究員の専門分野に限定されないテーマ「トランスナショナリズム」を掲げ、連続した研究活動を重ねるようつとめた。社会学、哲学、人類学、歴史学、政治学等、国内外の研究者が協働して、基本的な概念の検討から個別の事例を掘り下げる調査研究を行った。「学際分野の拡充への期待」に対しては、情報科学と文系分野のコラボ企画として研究会を行った。

なお、従来からの課題であった第三者評価は、運営委員会で実施方法について議論し、9月に学外有識者による外部評価を受けた。「国外との研究連携事業」「国内研究会活動」「データベース事業」「刊行物等」「その他」の五項目すべてにおいて高い評価をいただいた。

2 各基準の改善・向上

基準 6 教員・教員組織

6.3 教育研究活動等の改善・向上、活性化につながる取り組みを組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上につな
げていること。

6.3①研究所（センター）内で教員の研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るために、組織的な取り組みを行い、成果を得ていますか。	S. さらに改善した又は新たに組み込んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	A（概ね従来通りである又は特に問題ない）
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		

基準 9 社会連携・社会貢献

9.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施していること。また、
教育研究成果を適切に社会に還元していること。

9.1②社会連携・社会貢献に関する取り組みにより、地域や社会の課題解決等に貢献し、大学の存在価値を高めることにつながっていますか。	S. さらに改善した又は新たに組み込んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	A（概ね従来通りである又は特に問題ない）
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		

III 2023 度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準	研究活動
中期目標	「国際日本学」という研究分野の存在が広く認知されてきたことを受けて、対象分野を拡大充実させ、特に「現代日本」の研究を本格化させていくことを目指す。国際日本学研究所と深く関わる、国内外の他の機関との連携をさらに強化する。
年度目標	従来の「国際日本学」研究をさらに推進するとともに、新しい研究分野として「現代日本」に関する調査研究を行う。
達成指標	研究対象および連携研究者の増加
年 度	執行部による点検・評価
	自己評価

未 報 告	理由	「現代日本」を考えるトピックとして「トランスナショナリズム」をキーワードとした研究会を連続で行った。対面で国際会議アルザス・ワークショップ「現代日本のトランスナショナルな変容」を行い、国内外の他の機関との連携を強化できた。また従来から積み重ねてきた歴史研究も今年度は着実に進めることができた。国際シンポジウム「近世日本列島北部地域の光と影」を開催するなど、研究対象および連携研究者を増やすことができた。
	改善策	海外の若手研究者に本研究所の情報をさらに伝えるため、より積極的な広報活動を行う。
評価基準		社会連携・社会貢献
中期目標		研究所からの情報はHPを通じ、広く、迅速に発信する。また本務に影響の出ない範囲で、マスコミや研究者からの所蔵史資料原本の閲覧希望に応じるようにする。
年度目標		本研究所自設HPの英語頁の改修を行い、情報発信につとめる。
達成指標		研究会への一般市民の参加者の増加。公開された刊行物の増加。現状のウェブサイトの再検討と改善
年 度 末 報 告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	社会貢献という点では、所長による一般向けオンライン講座「江戸怪談を楽しむ」で2443名の方に受講いただくことができた。ウェブサイトは定期的に見直し、改善している。定期刊行物は滞りなく刊行できている。
	改善策	ウェブサイトの英語頁をさらに充実させる。
【重点目標】 昨年度の研究活動で導き出された現代日本を考えるうえでの重要なキーワード「トランスナショナリズム」研究を推進する		
【目標を達成するための施策等】 専任所員を中心に「トランスナショナリズム」をテーマとした研究企画（シンポジウム、研究会）を行い、成果をまとめる。		
【年度目標達成状況総括】 専任所員を中心に学内外の研究者との連携をすすめ、国際研究企画を開催することができた。「トランスナショナリズム」に関する調査研究会は合計4回行い、新たな分野を開拓できた。これまで研究を蓄積してきた領域においても、着実な成果をあげることができた。		

IV 2024 度中期目標・年度目標

評価基準	研究活動
中期目標	「国際日本学」という研究分野の存在が広く認知されてきたことを受けて、対象分野を拡大充実させ、特に「現代日本」の研究を本格化させていくことを目指す。国際日本学研究と深く関わる、国内外の他の機関との連携をさらに強化する。
年度目標	従来の「国際日本学」研究をさらに推進するとともに、「現代日本」に関する調査研究を行う。
達成指標	研究対象および連携研究者の増加
評価基準	社会連携・社会貢献
中期目標	研究所からの情報はHPを通じ、広く、迅速に発信する。また本務に影響の出ない範囲で、マスコミや研究者からの所蔵史資料原本の閲覧希望に応じるようにする。
年度目標	本研究所自設HPの英語頁の改修をすすめるとともに、海外向けの情報発信力を強化する。
達成指標	研究会への一般市民の参加者の増加。公開された刊行物の増加。現状のウェブサイトの再検討と改善
【重点目標】 昨年度からの研究テーマ「トランスナショナリズム」をさらに追求する。現代日本に特有な現象として「トランスナショナリズム」を考えるのではなく、歴史的な観点を加えて考究する。	
【目標を達成するための施策等】	

専任所員を中心に「トランスナショナリズム」をテーマとした研究企画（シンポジウム、研究会）を行い、成果をまとめる。